

岩崎育夫編

『アジアの企業家』

東洋経済新報社 2003年 ix + 288ページ

はっとりたみお  
服部民夫

本書はアジア各国を専門とする若手・中堅研究者による、「アジア企業家史」である。編者である岩崎氏は序章で、アジアの企業家を研究することには3つの意義がある、という。ひとつはアジア諸国の工業化が進み、製品を通して彼らと日本が繋がってきていること、2つ目はアジア諸国の企業家を横並びに見ることでアジアの多様な理解が進むこと、そして3つ目に活力溢れるアジアの企業家を知ることには停滞する日本の行く末を考える際にも役立つ、という。そしてアジアの企業家を取り上げるにあたっては、オーソドックスに国別に韓国、台湾、インドネシア、タイ、マレーシアが選定されている。

第1章（柳町功）は韓国の三星の創業者である李秉喆である。彼の企業家としての理念は彼の家族の儒教的な雰囲気、植民地の悲哀、そして父との関係で知己を得た李承晩大統領の愛国心などに影響され、それは端的には「信用」と「事業報国」（事業を通じて国家社会に寄与する）であるという。

第2章（川上桃子）は台湾の宏碁の施振榮である。同氏は台湾をパソコンおよびその周辺機器の最大の生産地へと発展させた立役者である。彼の事業展開にはOEM生産と、それに特化せず、「エイサー」というブランドを確立したい、とする後発の企業家が誰しも抱くある意味矛盾する志向が見られたと筆者はいう。

第3章（佐藤百合）は、インドネシアのサリム・グループの創業者リム・スイウリョンである。彼の事業は自分の企業家としての才覚と同郷の人々からの助け、そして何よりもスハルト元大統領との関係によって急拡大した、後発諸国における成功した後没落した企業家の典型的な例であった。

第4章（上田曜子）はタイのバンコク銀行を育て上げたチン・ソーポンパニットである。彼はタイで

生まれた二世だが、タイにおける抗日運動人脈、政治変動に伴った軍閥との関係、香港での亡命時代の人間関係など、「関係」を企業経営に利用・駆使した、サリムとはまた違った意味で典型的なアジアの企業家であった。

第5章（岩崎）はマレーシアのクオックである。彼も二世だが、典型的な二世というよりは英語を学び、ラッフルズ学院で学んだエリートである。彼の活動はマレーシア国内よりは香港、シンガポール、中国などで展開されており、それには彼が成長期に学んだある種の「国際性」が寄与しているのであろう、とする。

終章において編者はアジア企業の類型化の後、アジア企業家の今後についてアジア経済危機のインパクト、グローバル化、中国の台頭、ガバナンス改革の影響を指摘している。

以上が本書の概略だが、アジアの代表的な企業家を横並びで検討するという点で興味深い。各章末にそれぞれの企業家と関連させた年表が作成されているが、この年表を見るだけでもこれら企業家や経済環境のダイナミズムが理解され、興味は尽きない。

いくつかの感想を記して短評を終わりたい。その第1は、「アジア企業家」というよりは「華人企業家」という感がぬぐえないことである。華人以外の企業家、例えばインド人企業家についても並べて知りたかった。第2は、当然とは言え、筆者ごとに重点が置かれた論点が少しずつ異なり、焦点が「企業」なのか、「企業家」なのかいささか不明な部分が見られる。第3には、台湾を除くいずれの章においても、企業家が形成した「関係」と「政府の庇護」が成功の鍵をなしており、それが合理化、近代化されてゆくことに将来を見ているが、そうだとすれば、本書の課題＝「アジア的」な企業家の特質とはいかなるものなのだろうか。

最後に、本書はアジア企業家研究における現在の水準を示すものとなっている。一層の研究の深化のためには、方法論が強く問われるレベルに達したことを実感させられた。

（東京大学大学院人文社会系研究科教授）